

報道発表資料（案）

# 瞑想（ダイアログ）ルーム 「間（あいだ）」

瞑想ではなく、自分自身との対話へ。

便利さと速度が行き交う時代に、  
問いを持ち、内側の声に耳を澄ますための  
静かな宿泊体験。



## PRESS RELEASE

# 平野屋、内省と対話のための新空間

## 瞑想（ダイアログ）ルーム「間（あいだ）」をオープン

瞑想ではなく、“自分自身との対話”を深めるための宿泊者向け体験。現代版湯治を掲げる老舗旅館が、便利さと速度の時代に必要な「問いの時間」を提案します。

### 便利さと答えの時代に、あえて「答えのない問い」と向き合う時間を

生成 AI は、問いを投げかければ瞬時に答えを示してくれる時代になりました。便利で、正確で、効率的な社会である一方で、私たち人間にとって本当に大切なのは、すぐに答えの出ない問いと向き合う時間ではないでしょうか。

将来のこと。過去のこと。大切にしてきたもの。まだ言葉にできない感情。答えのないことを考えること、迷いながら自分の内側に耳を澄ませること。そこにこそ、人間らしい豊かさがあると平野屋は考えています。

また、旅の本来の目的は、単に名所を巡ることや日常から離れることだけではなく、見知らぬ場所に身を置くことで、自分の価値観や感覚が少しずつ変わっていく「自己変容」にあるとも言われています。

平野屋は、旅を通じて日常を見つめ直し、これからの自分と静かに向き合う時間を提供するため、新たな空間として、瞑想（ダイアログ）ルーム「間（あいだ）」をオープンします。

## 瞑想（ダイアログ）ルーム「間（あいだ）」について

### 瞑想ではなく、自分自身との対話へ

一般的には“瞑想ルーム”と呼ばれるような静謐な空間でありながら、平野屋が目指すのは、単に心を落ち着かせることではありません。

過去と未来の間、他者と自分の間、意識と無意識の間。その「あいだ」に静かに身を置き、言葉になる前の感覚に耳を澄ませ、自分自身と対話するための空間です。

「間（あいだ）」は、土の中のような深い静けさを持つ空間です。お客様には、いったん外の世界から離れ、自らを一粒の種のように沈めていただきます。

すぐに答えを出す必要はありません。ただ問いを抱き、想いを巡らせ、言葉にならない感覚に耳を澄ませる。その時間を経て部屋を出るとき、心のどこかで小さな芽がひらくような体験を目指します。

## 体験方法

### タスクカードを手に取り、問いとともに入室する

宿泊者は入室前に、9枚あるタスクカードから1枚を手に取ります。カードには、日常ではなかなか立ち止まって考えることのない問いが記されています。

たとえば、

「もしもタイムマシーンがあるとしたら、あなたは本当に乗りますか？」

その問いを携えて暗がりの中へ入り、静かに座る。あるいは、横になる。姿勢を決める必要も、正しい過ごし方を探す必要もありません。

大切なのは、答えを出すことではなく、問いとともにしばらく過ごすことです。タスクカードは、お客様が自分自身とダイアログするための小さな入口です。

問いを読み、沈黙し、考え、時には考えない。その余白の中で、普段は見過ごしていた自分の感情や願いに、そっと気づいていく時間を提供します。

### 平野屋が目指す「サバティカルな体験」として

平野屋は、旅館での滞在を「サバティカルな体験」と捉えています。

サバティカルとは、大学教授などの長期研究休暇に由来する言葉で、単なる休暇ではなく、次の課題や人生の局面へ向かうための充電期間を意味します。

サウナで頭を空にし、ライブラリで言葉と出会い、タスクカードの問いを手に取り、「間（あいだ）」で自分自身と対話する。

平野屋はこの一連の体験を通じて、温泉旅館が本来持ってきた「心身を整え、生き方を見つめ直す」価値を、現代の滞在体験として再編集していきます。

ホテルのような便利さや機能性だけでなく、旅館だからこそ生まれる余白、不便さ、人の手触り、土地の記憶。その中に、人がもう一度、自分自身を取り戻す時間があると考えています。

瞑想（ダイアログ）ルーム「間（あいだ）」は、平野屋が掲げるサバティカルな体験の中で、お客様が内なる声を聴き、小さく自己変容していくための、もっとも静かな空間です。

名称	瞑想（ダイアログ）ルーム「間（あいだ）」
所在地	愛知県蒲郡市三谷町南山 1-21 平野屋 館内
利用対象	平野屋 宿泊者向け
オープン日	2026年6月1日
設計	Itoto architects（蒲郡市）

